

散歩をしていると、いろいろな音が聞こえてくる。特に夜。車の音、エンジンの音やドアを開け閉めする音、人の話し声、向こうから来る人の足音、少し早い時間なら窓から漏れるテレビの音。自然の音もある。この季節なら雪が解ける音、解けた水が滴る音、流れる音、解けて瘦せた雪が崩れる音、そして木や枝を揺らす風の音。

しかし、二度だけ音の無い世界に入り込んだことがある。

春先のある日、峠を越えようと友人と車を走らせた。通行止めの看板に車を降りてその先を望むと、道路はまだ雪で埋まっていた。戻ろうとして思わず立ち止まり、あたりを見回し、そして同行の友人と目を見合わせた。

何の音も聞こえない。峠の中腹はまだ雪解けがはじまっておらず、谷の沢水もまだ凍りついていた。どんよりと曇った風の無い日で、山の本々は身じろぎもせず、静まり返っている。通ってきた町のざわめきも、遠くを走っているはずの汽車の音も聞こえない。自分の息や心臓の音まで聞こえなくなるような、何とも言われぬ感覚だった。30数年前、あの峠での話である。(K)

広告